Heger I 式銅鼓における2つの系統

今　村　啓　爾

1. はじめに

筆者はかつて Heger I 式銅鼓とそれに先行する銅鼓の編年について論じたことがある（今村 1973)。当時日本では大型の銅鼓が小型の銅鼓から発達したという意見と小型の銅鼓は大型の銅鼓の退化した型式であるという意見があったため，筆者の主張は大型で打面に複数の画文帯を持つ銅鼓と小型で1つの画文帯を持つ銅鼓が同時に存在し，作り分けられたものであることを強調することに向けられた。石寨山の銅鼓を一系統として扱ったが，上記のような事情から，系統的把握には不十分なところがあった。

その後，銅鼓資料の発見，発表はめざましく，それによって第I型式内における系統差の存在が明確になり，これについて論ずる必要が高まってきた。そこで今回は Heger I 式だけをとりあげ，その中にある2つの系統と各系統内での大型，小型の作りわけを同時に考えることにする。

ここで行なう基本的な分類は次のようである。

- ヘーガー第I型式銅鼓
  - 石寨山系
    - 複画文帯
    - 単画文帯
  - ドンソン系
    - 複画文帯
    - 単画文帯

なお銅鼓の名称は最近出版された3つの大きな資料集に従う。つまり，中国については『中国古代銅鼓』，『広西銅鼓図録』，ベトナムについては『ベトナム，ドンソン銅鼓』，それ以外の東南アジアについては "Kettledrums of Southeast Asia" によることにする。

『ベトナム，ドンソン銅鼓』はベトナムにおいて現物が確認できるすべての資料について写真，実測図を収録した画期的な出版であり，小論もこの集成に負うところが非常に大きい。

2. 石寨山系とドンソン系（表1）

石寨山系とドンソン系の違いについては以前簡単に述べたことがある（今村 1989)。はじめに各分類項目の基本的な特徴をあげておく（表1)。

表1　石寨山系とドンソン系の主な特徴

	器　　形	画文帯配置	縁取り文様	中心円内	画文の表現
石寨山系複画文帯	胴部ラッパ形	内側に動物文 外側に飛鳥	鋸歯文	斜線と山形	打面側面とも陰刻的表現が多い
石寨山系単画文帯		飛鳥			打面は陰刻と凸線 側面は多く凸線
ドンソン系複画文帯	胴部円筒形	内側に羽人 外側に飛鳥	細い鋸歯文か櫛歯文	孔雀文と山形	打面に陰刻的表現ある。側面は凸線
ドンソン系単画文帯		飛鳥	櫛歯文		打面，側面とも凸線

石寨山系は，雲南，広西に多いものであるが，ベトナムにもかなり見付かっている。分布の中心から，「雲南系」と呼びたい気もするが，起源地や製作地については，編年と系統関係がはっきりしてから解明すべきであるので，起源地や製作地を意味すると受け取られかねない名称は避け，代表的な遺跡名をとり，「石寨山系」と呼びたい。

ドンソン系はベトナムに多くみつかっているものであるが，中国の広西壮族自治区にもあり，タイ，マレー，インドネシアにも広く存在する。分布の中心から「ベトナム系」としたいところであるが，やはり石寨山系と同じ理由により，代表的な遺跡名をとって「ドンソン系」と呼びたい（ただしドンソン遺跡からは石寨山系の銅鼓やどちらにも属さない銅鼓も出ている）。

両系統の特徴は複数の画文帯をもつ大型の銅鼓（複画文帯銅鼓）においてよく認められる。石寨山系では裾広がりの胴部（中国では腰部と呼ぶ），ドンソン系では円筒形の胴部を持つ。写実的な題材の文様（画文）の配置において，ドンソン系では内側に羽人のくりひろげる情景，外側に飛鳥文を配置することが多い。石寨山系でも外側には飛鳥文を配置するが，内側には鳥以外の動物文を配することが一般的である。幾何学文では石寨山系に幅の太い三角形からなる鋸歯文が一般的であるが，ドンソン系では細長い三角形からなる鋸歯文とこれから転じたとみられる櫛歯文が一般的である。また石寨山系では幾何学文の種類が少ないのにに対し，ドンソン系ではさまざまな幾何学文が比較的きちんとした配置上の約束をもって配置されている。

以上は大型で打面に複数の画文帯を有する銅鼓であるが，小型で打面に1つ飛鳥文の圏を有するだけの銅鼓（単画文帯銅鼓）は文様が単純で特徴が少ない。しかし大型の銅鼓と比較することによって，どちらの系統に属する簡略形であるかが判断できる。

これまでに知られている Heger I 式銅鼓（先 I 式を除く）のうち90パーセント以上はこの両系統に属することが確かなものであるが，これらの系統に属するとはみなし難い銅鼓も若干存在する。またどちらの系統に属するか判断に困るような中間的なものが，数は少ないが存在する。これはあとでのべるように石寨山系とドンソン系の関係を考える手掛かりとなるものである。

3. ヘーガー第Ⅰ型式における新旧を示す要素

はじめにヘーガー第Ⅰ型式銅鼓一般について，新旧を判定するのに役立つ大まかな傾向について述べる。もちろん細部については系統ごとに違いがある。

器形：古いものは，頭部の最大径に比べ打面の直径が小さい。別の言い方をすれば，打面の相対的な大きさは年代が下がるほど大きくなるのである。古いものは頭部の膨らみが強く，器高全体の中で頭部が占める割合が大きい。古いものは脚部が低い。これらの割合も時期が下るほど逆の方向に変化する。つまり頭部の占める割合が小さくなり，脚部が高くなるのである。そのほかある段階から打面上に蛙の立体像が加えられるようになる。

文様：古いものは，人物や動物を表現する文様（画文）が実物を写したため写実的であるが，時代が下り，それを繰り返し描くうちに様式化，便化する。ただし1973年の段階でもある程度予想されたことではあるが，写実性の程度には作りかたの丁寧さや職人の技量が関係する場合があると考えられるし，鳥のように何を表したのかがわかる図柄では写実的なものに復活することがある。

そのほかにある時期にだけ特徴的に見られる文様や文様の組み合わせ方があり，紋章文のように細かい時間的変化をよく反映する文様もあるが，それらについてはあとでとり上げる。

鋳造：第Ⅰ型式のうちでも人物や動物が写実的に表現されるものでは，その文様が陰刻風に表現される傾向が強い。写実的画文を古いと考える限り，陰刻表現も古い特徴といわなければならない。これは次第に凸線による表現に置き換えられるが，側面の画文が先に凸線に置き換えられる傾向をもち，次いで打面も凸線に置き換えられる。しかし，画文の陰刻表現も，写実的な画文と同様に精製の銅鼓に著しい特徴であるので，製作の精粗の違いとしても考える必要がある。この点で，私の1973年の編年のもっとも古い部分については再考の必要がある。第Ⅰ型式末期には，繰り返される文様を加える簡便な方法としてスタンプが用いられるようになる。スタンプは連続円文のような単純な文様についてはかなり古くから用いられている。このころから文様帯を区画する凸線が高くなる。

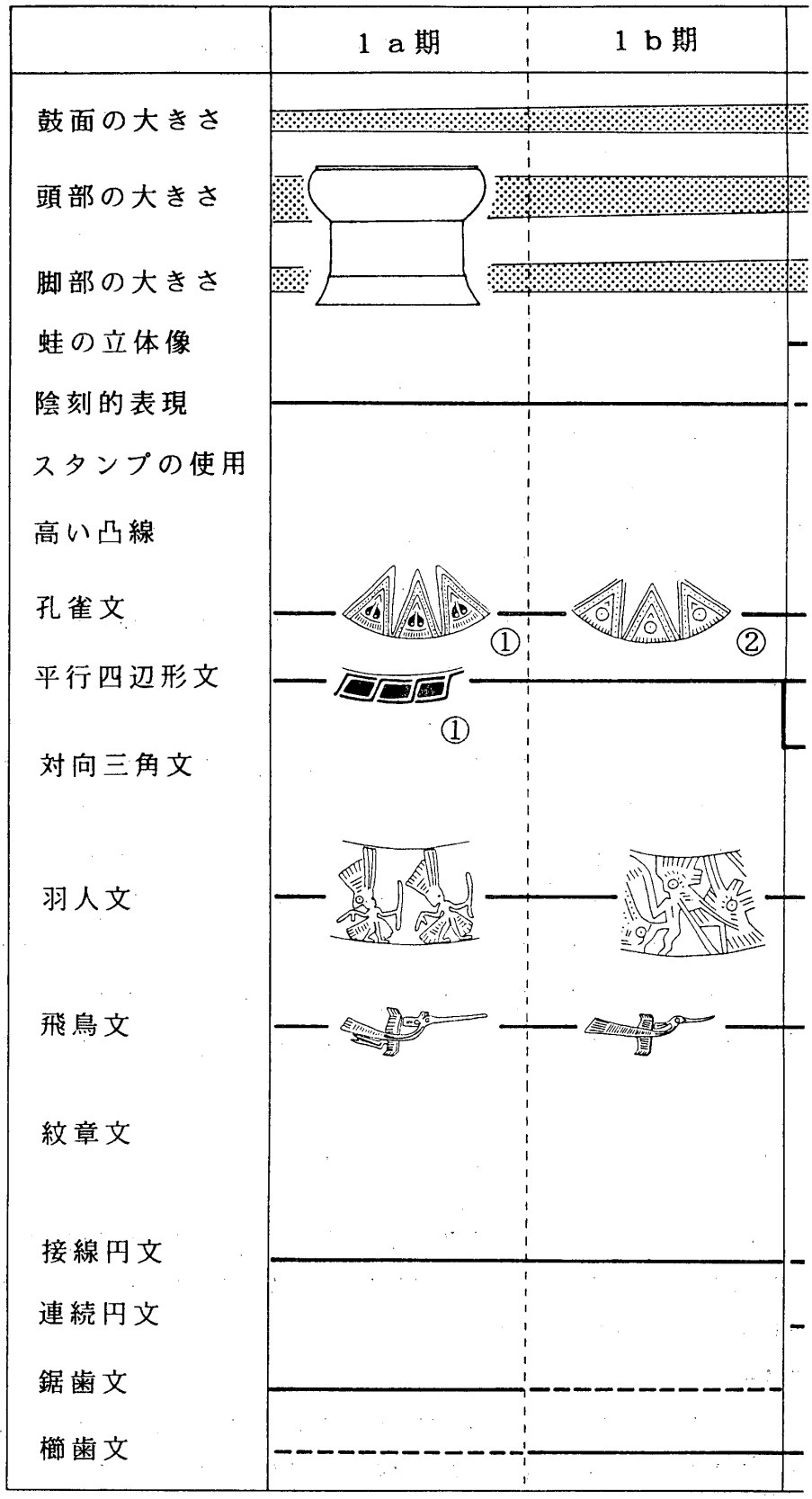
4. ドンソン系複画文帯銅鼓の変遷（図１）

変遷を知るための手掛かりを多くもち，年代的にもっとも長く続いた系統は，ドンソン系の複画文帯銅鼓である。はじめにその変遷を整理し，次にそれを編年の基準軸とし，他の系統をこの軸に対比する方針で進むことにしたい。

第１期

頭部が大きく，胴部は円筒状，脚部は石寨山系に比べると高いが，以後の段階と比べると低い。蛙の立体像は現われていない。画文は多くが写実的。画文の表現は打面では陰刻状，側面は凸線による。中央光芒の間はみな「孔雀文」で，中央の星形の周りに平行四辺形文（①）の帯が巡るという規則性がある。縁どり文様に細長い鋸歯文が用いられる。細長い鋸歯文が櫛歯文におきかえられ

たものは，その成立の順序や，Quang Xuong 鼓のように相当に便化した羽人文や大きくなった打面を持つものがあることから，新しい傾向を有するものとみられる。しかし櫛歯文の銅鼓のなかには櫛歯文以外に鋸歯文の銅鼓と違いが認められないものもあり，単純に前者が古く後者が新しいというわけにはいかない。両者はある程度時間差を持ちつつも，共存する時期のある，前後にずれた関係なのであろう。両者を１ａ期，１ｂ期とするが，両期は大きく重なる関係にあるとみられる。



第２期

器形では第１期に比べて頭部が小さく，脚部が高い傾向が見られる。この段階から蛙の立体像が打面上に付けられるようになる。画文の表現は，打面，側面とも凸線であるが，打面ではやや陰刻風のものもある。羽人はまったく便化し，これだ

Heger Ⅰ式銅鼓における２つの系統

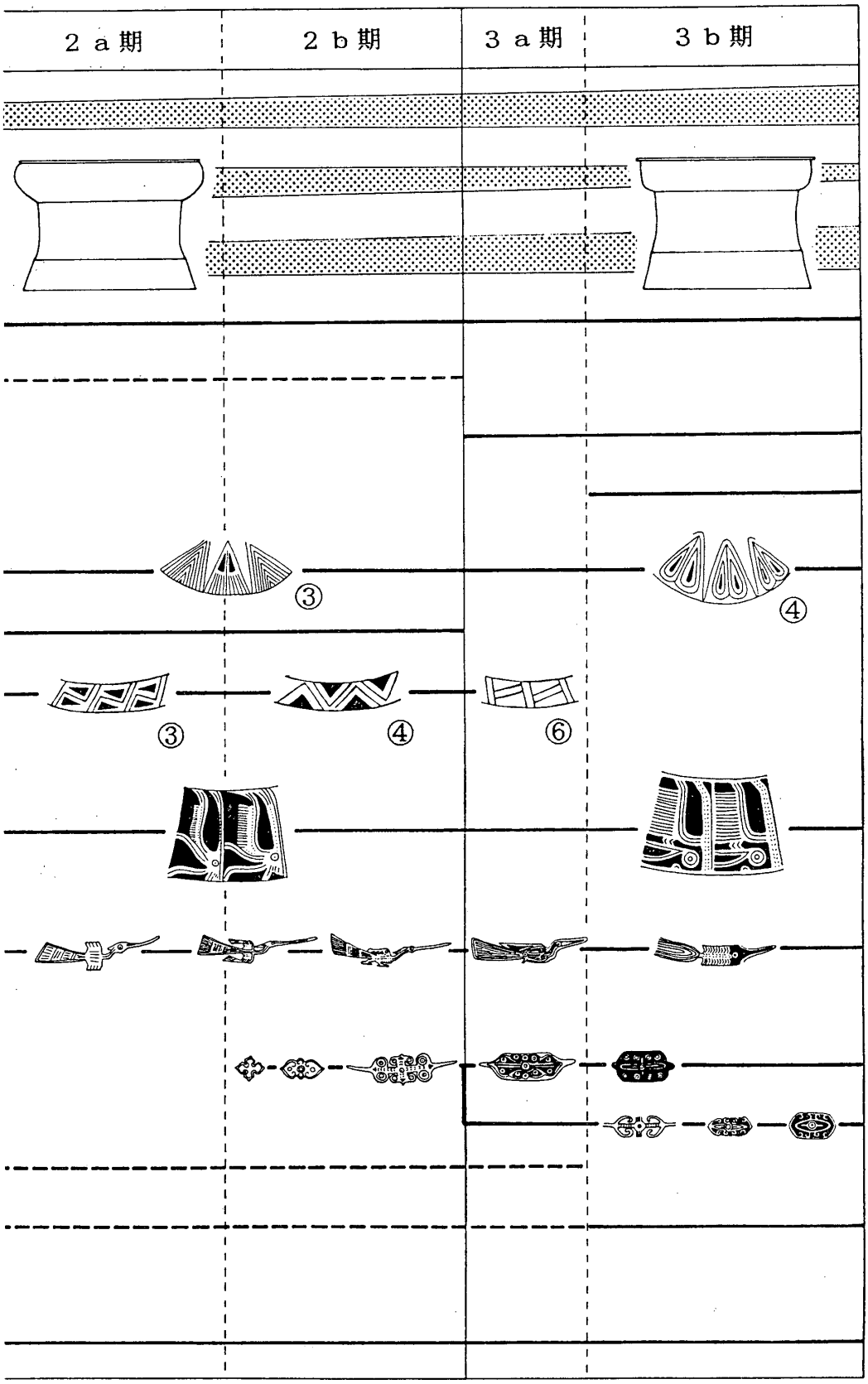


図１　ドンソン系複画文帯銅鼓の変遷

け見ても何を描いたのか分からない。光芒の間の文様において1つおきに孔雀文と山形（または斜線）をくり返す規則性があり，この規則性は前後の時期にはほとんど見られないものである。多くに菱形雷文があるが，これは第3期に続く。この時期の中で紋章文が出現，発達し，さらに第3期に続いていく。その紋章文の変化は細かい時期の差を判別するのに役立つ。第1期の平行四辺形文からこの時期に横方向の対向三角文（③）が派生し，さらに縦方向の対向三角文（④）に変わる。

この第2期は紋章文が無く，横方向対向三角文を有する前半期と紋章文を持ち，縦方向対向三角文を有する後半期に分けられる。後半期には文様が脚部にまで拡がる。これらを2a期と2b期とする。

第3期

打面の頭部側面への突出が顕著で，打面直径は頭部直径より大きくなる。蛙が第2期から続く。圏を区画する凸線が高くなり，繰り返す文様はスタンプを作って鋳型にそれを連続的に押し当てて加えられるようになる。全体に圏の数が増え，打面の周囲の無文の部分がごく狭くなるか，全く無くなる。脚部にも文様が加えられる。光芒の間がみな孔雀文になる点，第2期と異なる。平行四辺形文とその流れを汲む文様が見られなくなるのも第2期と異なる。しかし紋章文は第2期から引き続き変化するし，菱形雷文も変形してなおも続く。飛鳥は退化し魚の骨のような形になる。

ただし詳しく見ると第3期の初頭では第2期に近い要素が続いている。それは圏を区画する凸線がまだ高くなく，光芒の間は孔雀文と山形文が交互に繰り返し，対向三角文（④）から変化した文様（⑥，⑦）がある。鳥は歩く形の特徴的なもので，第2期の終りにも見られるものである。この第3期初頭に属する資料は少ないが，この部分を3a期として，以後の3b期と分けることができる。

この第3期に属する中国の銅鼓の中には地域的特色を有するものがあるが，この地方色の問題は今後の検討課題である。

以上の変化を図1にまとめた。

5. ドンソン系単画文帯銅鼓を複画文帯銅鼓の変遷に対比する

単画文帯銅鼓は文様が簡略なので型式的手がかりが複画文帯銅鼓より少ない。

ドンソン系の蛙を持たない単画文帯銅鼓は非常に数が多く，ベトナム出土の第Ⅰ型式銅鼓の3分の1以上を占める。このうち文様が非常に少ないものでは無理だが，文様が比較的多いものでは，文様の組み合わせにより前後2時期に分けることができる。前半は，＜①または②の形の孔雀文＞＋＜平行四辺形文または雷文＞＋＜接線円文＞＋＜あまり便化していない飛鳥文＞の組合せを持つのに対し，後半は＜③の孔雀文（孔雀文と山形文が交互になるものが多い）＞＋＜横方向の対向三角文＞＋＜連続円文＞＋＜便化した飛鳥文＞の組み合わせである。使用される文様の種類から，前半は複画文帯の1期（とくに1b期）に，後半は複画文帯の2a期に共通性があり，年代的にも対比されるものと思われる。そうすると，2a期には複画文帯銅鼓は蛙を持ち，単画文帯銅鼓の多く

は蛙を持たないことになる。

蛙をもつ単画文帯銅鼓の資料は多くない。蛙を持つ単画文帯銅鼓で２ａ期に属するものは１点(Lac Long) しか知られていないが，蛙を持たない単画文帯銅鼓の一部がこの時期に下るので，数の不足はない。

２ｂ期に属する単画文帯銅鼓は５点にすぎない。この時期の銅鼓は多くが複画文帯として作られたらしい。この２ｂ期には，紋章文，縦方向対向三角文，菱形雷文（単画文帯では多くが三角雷文に変わっている。）が単画文帯銅鼓と複画文帯銅鼓の時間的並行関係を保証している。

この２ｂ期に単画文帯銅鼓が減少し，複画文帯銅鼓に偏る傾向は次の第３期になると一層強まり，もはや単画文帯銅鼓は見られなくなる。

6. 石寨山系とドンソン系の関係

次に石寨山系をドンソン系に対比してみよう。石寨山系の銅鼓はドンソン系に比べて全体として器形や装飾の変化が少ない。これは１つにはこの系統があまり長く続かなかったことと関係があるのであろう。

以下，はじめに石寨山系における蛙の小像について考え，石寨山系とドンソン系の中間的銅鼓の存在を指摘し，次に実際の遺跡での共存関係について見ることにする。

石寨山M10―３銅鼓

石寨山系では，石寨山M10―３銅鼓が打面に蛙をもつ点で稀有の例であり，さらにこの銅鼓は打面の直径が大きく，頭部はやや縮小し，脚部が相当に高いという新しい要素をもっている。脚部は高いが，胴部の裾広がりの器形は石寨山系の特徴である。したがってこの銅鼓は石寨山系の末期の形を示し，その年代がドンソン系の蛙の出現に近く[1]，ドンソン系第２期に近いことを示す重要な資料である。この石寨山M10―３を除くと石寨山系の銅鼓で打面に蛙を有するものはランヴァクＶの打面破片があるだけである。石寨山系がドンソン系のほぼ１期，下っても２ａ期に並行することを示すのであろう。

M10―３以後石寨山系の系統を引く資料は発見されていない。石寨山系は非常に短命で終った系統である。

石寨山系とドンソン系の中間的銅鼓

銅鼓のうちには数は少ないが，表２にあげるように，石寨山系の特徴とドンソン系の特徴を合せ持っているものがある。これらは両系統の関係を解明するうえでの手掛かりになるものである。ドンソン系の要素のうち年代の推定できるものはみな第１期の要素である。このことは石寨山系がほぼドンソン系の第１期に並行することを示している。

表2　石寨山系とドンソン系の中間型銅鼓

	石寨山系の要素	ドンソン系の要素
Wieu Mon Ⅰ	器形・鋸歯文・打面の動物文 側面の陰刻状表現	孔雀文・平行四辺形文（1期）
Ban Thom	器形・鋸歯文	打面の羽人（1期）
Hoa Binh	打面の動物文・側面の陰刻状表現	器形・孔雀文・平行四辺形文 細長い鋸歯文（1期）
Son Tay	鋸歯文・光芒間の山形	器形
羅泊湾　M1-11	器形	櫛歯文
貴県高中	器形	櫛歯文

遺跡での共伴関係

次に遺跡におけるドンソン系と石寨山系の関係，とくに1つの墓から両方の系統の銅鼓が出た例をみる。

広西羅泊湾1号墓で石寨山系単画文帯に属する銅鼓で非常に写実的な画文を持ち，側面，打面に陰刻的表現をもつものと，ドンソン系銅鼓を転用した銅三足案が共存している。三足案は文様からみて第1期，おそらく1b期に属する。

広西西林普馱の281号鼓は石寨山系に属するが，ラオス鼓に近いきわめて写実的な飛鳥文を有する。282号鼓はドンソン系で横向きの対向三角文からみて2a期であろう。283号鼓はドンソン系で，年代は1b期ないし2a期であろう。281号鼓は石寨山系のうちでも古い時期のものとみられるから，282号鼓とは時期が異なると考えざるをえない。ひとつの墓の中の遺物が製造年代において必ずしも同一時期とは言えないことを示すものとして注意される事例である。

小　結

かつて筆者は銅鼓の年代が分かるような状態での出土例があまり知られていない時期に，銅鼓の変遷を型式学的に推定した。そこではラオス鼓，ネルソン鼓（ともに石寨山系の複画文帯銅鼓に属する）をヘーガーⅠ式の最古のものとした。その理由としては，（1）大きい頭部，小さい打面，低い脚部という形の特徴が先Ⅰ式にもっとも近い。（2）もっとも写実的な画文が見られる。（3）画文の陰刻状の表現はヘーガーⅠ式のうちでも古い段階に顕著な特徴であるが，この特徴がもっとも集中的に見られるのは，打面，側面ともに陰刻的表現の行なわれている上記の銅鼓である。

石寨山系は形態において先Ⅰ式に近い。しかし文様について見ると，先Ⅰ式と石寨山系のうちでもっとも近いものを比べてみても相当な隔たりがある。文様のモチーフが違うだけではなく，写実的な文様の表現の技巧，精密で陰刻的な文様の鋳出において先Ⅰ式との間に飛躍的な上昇が認められる。この間に高度な技術の導入があったと見るべきであろう。

このような成立のおおまかな経過が推定される石寨山系に対し，先Ⅰ式と器形が大きく異なるドンソン系銅鼓は，先Ⅰ式からの変化で成立の説明ができない。ドンソン系は石寨山系または石寨山

系に近い銅鼓から派生して成立した可能性が考えられる。ドンソン系のなかでも本来の鋸歯文を有するものが古く，これが櫛歯文に変化したものはおくれて出現したものであろう。しかし石寨山系全体がドンソン系より古く位置づけられることはありえない。なぜなら石寨山M10―３号鼓は，石寨山系の終末がドンソン系の２期に近いことを示しているからである。したがって石寨山系は出現においてドンソン系より古いとしても，ドンソン系第１期にはずっとドンソン系と共存したと考えられる。その終末，すなわち石寨山M10―３号鼓の時期は，ドンソン系単画文帯銅鼓に広く蛙が見られるようになる２ｂ期かとも思われるが，石寨山系が全体的に器形，文様において古い様相を示すこと，M10―３以前に蛙を持つ石寨山系銅鼓が無い点を重視し，ドンソン系に蛙が現われるのと同じ時期，すなわち２ａ期と考えたい。

石寨山系については現在の段階でその細分を論じることができない。このため，石寨山系の成立をもって第１期のはじまりとしたい。石寨山系は１期～２ａ期に続いたことになる。石寨山系はこの期間ドンソン系と共存したのに，器形，文様において古い特徴を多く維持したことが注意される。

7. 実 年 代

相対的前後関係による編年の軸はドンソン系複画文帯銅鼓に求めたが，伴出遺物から実年代のわかる銅鼓の多くは石寨山系に属している。このため上述の時期区分に実年代をあてるには二重の対比が必要となる部分が多くある。

第１期

ヘーガー第Ⅰ型式について共伴した中国系遺物から年代を与えられるもっとも古い時期の遺跡として，中国雲南省石寨山，李家山，広西壮族自治区羅泊湾，ベトナムヴェトケがある。石寨山第Ⅰ類型墓，李家山第１類墓の年代は後続する時期の墓からさかのぼる形で推定された点に問題を残すが，戦国末～前漢早期という年代が大きく外れることはありえない。羅泊湾１号墓，ヴェトケは伴出した中国系遺物からそれぞれ前漢早期，戦国末～前漢早期に比定される。問題はこれらの遺跡で出土した銅鼓が銅鼓編年のどの段階を占めるかである。羅泊湾Ｍ１―10銅鼓は写実的な画文，打面，側面における陰刻的表現において第１期中にあっても古い様相を持つものである。ヘーガーⅠ式の開始がこれから大きくさかのぼるとは考えられない。羅泊湾Ｍ１―13の三足案はドンソン系１期に属するが，１期の初頭まではさかのぼらないのではないか。このことから第１期の初めの年代をほぼ紀元前３世紀に推定することができよう。ドンソン系については銅鼓と年代の分かる遺物が１つの墓で伴出し，細かい年代を推定できる事例がほかに無いようであるが，ドンソン遺跡やランヴァク遺跡における墓地全体の状況からほぼ前漢の時期に属するとみることができる。

第２期

第２期についてはドンソン系で年代を特定できるものがないが，石寨山のM10―３号銅鼓が問題となる。この銅鼓を第２期の初頭と考え，この墓を石寨山第２類型墓のうちでも新しいものとして

紀元前2世紀の末に当てることにより，第2期が紀元前2世紀末～1世紀初頭にはじまったとしたい。

第3期

原田淑人（1937）が紹介した底部に銅鼓と同じ文様を持つ洗は後漢の後半に多い（梅原 1963）ものである。その羽人文はドンソン系の第3a期にもっとも近い。ヘーガーが紹介した Victoria and Albert 博物館の銅鼓（第3期）は後漢の建安4年の銘（A. D. 199年）を有する（Loewenstein 1956）。広西藤県冷水沖出土の100号鼓は嶺南地区の後漢の墓に見られる四耳陶罐を伴っていたという。以上から第3期が紀元後2世紀頃に始まったとすることができよう。また冷水沖110号鼓は黄釉陶碗を伴っていた。これは嶺南の南朝の時期のものであるという。したがってその下限は紀元後5世紀かそれ以後に及ぶことになる。これらから

第1期：紀元前3～2世紀

第2期：紀元前1～紀元後1世紀

第3期：紀元後2～5，6世紀

と割り振ることができよう。

なお，銅鼓の年代の資料として放射性炭素年代測定値をとりあげる研究者も多いが，放射性炭素年代には様々な原因によって発生する誤差があり，詳細な編年研究には適合しない。

8. 石寨山系銅鼓の断絶と冷水沖型の起源

石寨山系は第2期の初めをもって終焉する。これまで発表された資料を見るかぎり，確実に第2期に属するものは知られていないようである。中国ではドンソン系を含めても第2期に属する銅鼓は少ない（西林，貴県高中）。今後の発見はもちろん予想すべきであるが，現在の分布状況が大きく変わることはないであろう。これに対しベトナムでは2期の銅鼓が非常に多く知られており，連続的，漸移的変化によって第3期の銅鼓に変化する。第3期の銅鼓は中国広西壮族自治区でも多数知られ，冷水沖型と呼ばれている[2)]。これはこのような経過からもわかるように石寨山系の系統をひくものではなく，ベトナムを中心に分布するドンソン系銅鼓の系統をひくものである。

9. 東南アジア南部の銅鼓

先Ⅰ式の発見例は中国雲南省に多いが，東南アジアでもヴェトナム，タイに先Ⅰ式銅鼓の存在が知られている。

ヘーガーⅠ式の第1期石寨山系の資料としては，タイのチェンマイで購入された“Beelaerts”鼓（Kempers 1988），ジャワの Babakan 鼓（Kempers 1988）がある。ドンソン系1期の例は，タイ，マレー，インドネシアに広くおよび，資料数も多い。これらは雲南，ベトナムのものと区別できる点は無いようである。ドンソン系と石寨山系がそれぞれの特徴をそのまま保持し，別の型式として存在することは，これらが中国，ベトナム方面からの輸出品であることを示すものであろう。

第2期になると，ドンソン系第2期の特徴を多くもちながらもヴェトナムには知られていないような特殊大型の銅鼓がインドネシア東部に多く知られるようになる。その独特の様相――(1)ヘーガーⅠ式としては他の地域に類例を見ない超大型のものが多くある。(2)大型銅鼓の中には文様の配置において，他の地域に見られないものがある。(3)便化した羽人文とともに新しく付け加えられた人物，動物，鳥などの写実的な画文が加えられる。(4)この地域の銅鼓に見られる特殊な文様がある。――はこれらがインドネシア内で作られたことを示すようにみえる。しかし(4)にあげた特殊な文様はマラヤの Kuala Trengganu (Peacock 1966) やタイの Ongbah Cave (Per Sørensen 1988) に及んでおり，東インドネシアに限られるものではない。

また東インドネシアの大型銅鼓に見られる文様のうちに複段化した羽人文があるが，これはマレー半島，南タイに広く見られ，さらにベトナムの第2b期の2例 (Huu Chung, Yen Bong II) の銅鼓にも見られる。

このように見ると，インドネシア東部の銅鼓は特殊ではあるが，完全に他の地域のものと切り離され，孤立した存在ではないことが分かる。ベトナムにまで連続性を維持しているのである。問題はこれら南部の銅鼓の製作地である。特殊な銅鼓が多く分布する東インドネシアで製作されたとみることは自然な見方であるが，この場合，類似の特徴を有するタイ，マレー半島の銅鼓や，数は少ないが同じ文様をもつ銅鼓がベトナムにもあることをどう説明すればよいのであろうか。大陸部で作られた超大型銅鼓の大部分がインドネシアに運ばれてしまったのか？，あるいはインドネシア製の銅鼓が大陸部に運ばれることがあったのか？，または，タイ，マレー，東インドネシアのものがそれぞれ派生して間もないために共通する文様を維持するのか？，派生後も文様の変化についての情報交換が維持されたのか？今早急に結論をだすことは出来ない。

注意すべきことは，これらの銅鼓が大型で特殊な文様を多く有するとはいっても，基本的にドンソン系の複画文帯銅鼓第2期の器形，文様の割り付けから大きく逸脱するものではないことである。ベトナムの第2b期と同じかせいぜいその直後，すなわち紀元後1～2世紀の年代を与えることができよう。

追記　小論は中国広西壮族自治区南寧市において開催された「中国南方及東南亜地区古代銅鼓和青銅文化第二次国際学術討論会」(1991年10月)において発表したものであるが，その後『広西銅鼓図録』の出版により明らかになった事実もあるので，一部書き替えた。しかし結論に関係するような変更はない。

註

1) ただし石寨山系で蛙をもつものは小型の銅鼓（ミニチュアに近いもの）に限られているので（石寨山とランヴァクV)，小型銅鼓に特別に早く現われた現象である可能性もあり，ドンソン系における第2期の蛙の出現一般とは区別されるやや早い現象であるかもしれない。ドンソン系の蛙は先述したように，大型銅鼓（複画文帯）に先に出現し，小型銅鼓（単画文帯）での出現は遅れるので出現の様子が異なっている。

2) 石寨山M10—3銅鼓を冷水沖型の初期として扱う見解もある。(『中国古代銅鼓』) しかしひとつの流れの末期に位置するこの銅鼓は石寨山型に含めるほうが適当である。私はドンソン系の流れを引き，石寨山系とは別の伝統を担うものとして第3期に中国南部に広がる銅鼓を冷水沖型と呼ぶのがよいと思っている。

参 考 文 献

今村啓爾 1973 「古式銅鼓の変遷と起源」考古学雑誌59巻3号

今村啓爾 1989 「第Ⅰ型式銅鼓に認められる特殊な鋳造方法について」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第8号

梅原末治 1963 「印度支那の古代遺跡遺物に就いての所見」史学35-4

原田淑人 1937 「銅鼓の製作年代に就いての一考察」考古学雑誌27-2

雲南省博物館 1956 「雲南晋寧石寨山古遺址及墓葬」考古学報1956-1

雲南省博物館 1959 『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』

雲南省博物館 1975 「雲南江川李家山古墓群発掘報告」考古学報1975-2

広西省文物管理委員会 1957 「広西貴県漢墓的清理」考古学報1957-1

広西壮族自治区文物工作隊「広西西林県普馱銅鼓墓葬」文物1978-9

中国古代銅鼓研究会編 1988 『中国古代銅鼓』

広西壮族自治区博物館 1988 『広西貴県羅泊湾漢墓』

広西壮族自治区博物館 1991 『広西銅鼓図録』

Vien Bao Tang Lich Su Viet Nam 1965 "Ngoi Mo Co Viet Khe"

Institute of Archaeology, Vietnam Social Sciences Committee 1990 "Dong Son Drums in Vietnam" Rocco Shuppan, Tokyo

Heger, F. 1902 "Alte Metalltrommeln aus Südost-Asien"

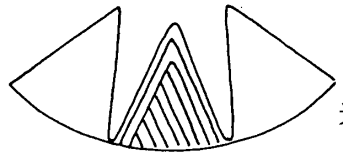
Loewenstein, J. 1956 The Origin of the Malayan Metal Age. Journal of the Malayan Branch, Royal Asiatic Society 29-2

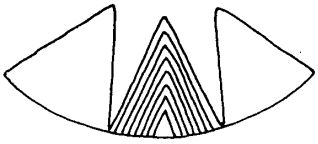
Peacock, B. A. V. 1966 Recent Archaeological Discoveries in Malaysia 1965. Journal of the Malaysian Branch, Royal Asiatic Society 38-1

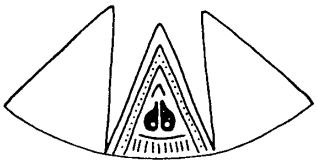
Sørensen, P. 1988 Archaeological Excavations in Thailand, Surface finds and minor excavations

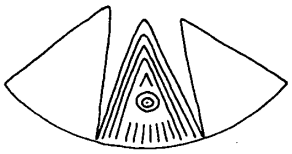
Kempers, A. J. B. 1988 "The Kettledrums of Southeast Asia". Modern Quaternary Research in Southeast Asia 10.

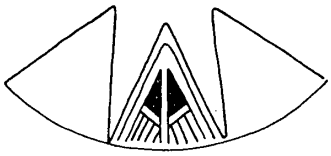
Heger Ⅰ式銅鼓における2つの系統

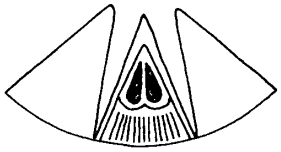

光芒間　「斜線」

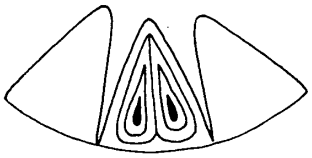

光芒間　「山形」


光芒間　「①」

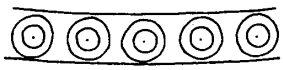

光芒間　「②」


光芒間　「③」


光芒間　「③'」

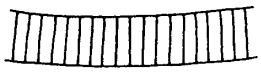

光芒間　「④」

接線円文


連続円文

鋸歯文

細鋸歯文


櫛歯文

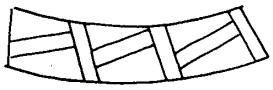
中央圏　「①」

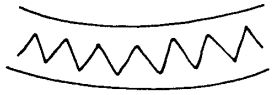
中央圏　「②」

中央圏　「③」

中央圏　「④」

中央圏　「⑤」


中央圏　「⑥」


中央圏　「⑦」

菱形雷文

三角雷文

図2　表3～5の凡例

表3　ベトナム出土**ドンソン系複画文帯**銅鼓（『ベトナムドンソン銅鼓』の再分類）

	番号　名称	蛙	画文帯	▲▲▲||	光芒間	中央圏	紋章文	雷文	円文	その他
1	1 Ngoc Lu I	−	3	▲▲	①	①		−	接線円	
a	2 Hoang Ha	−	2	▲▲	①	①		−	接線円	
期	4 Song Da	−	2	▲▲	①	①		菱形	接線円	
	5 Mieu Mon I	−	2（動物文）	▲	①	①		−	連続円	石寨山系との中間
	10 Hoa Binh	−	2（動物文）	▲▲	①	①		−	連続円	石寨山系との中間
	8 Mieu MonII	−	3（幾何と無文	▲▲	②	−		菱形	接続円	
1	3 Co Loa I	−	2	||	①	①'		−	接線円	
b	23 Yen Tap	−	2（動物文）	||	②	①		−	接線円	
期	9 Vu Bi	−	2（無文　）	||	?	①		−	接線円	
	22 Duy Tien	−	2（動物文）	||	②	−		−	接線円	
	21 Quang Xuong	−	2	||	斜線	−		−	接線円	
	77 Thanh Van	−	2	||	斜線	③		−	接線円	
	82 PhuPhuongII	4	2	||	山+③'	③		菱形	接線円	
2	83 Yen Bong I	4	2	||	山+③'	③		菱形	連続円	
a	86 Phu Luu	4	2	||	山+③	③		−	連続円	
期	87 TruongGiang	4	2	||	山+③'	−		−	接線円	
	80 Cho Bo	4	2	||	山+③'	④		菱形	接線円	
	79 Thon Bui	4	2	||	斜+①変	③	祖形？	−	接線円	
	78 Nong Cong	4	2	||	山+③'	①	+	菱形	接線円	
	85 Da But	4	2	||	山+③'	①	+	−	接線円	
2	75 Huu Chung	4	2	||	山+③'	④	+	菱形	接線円	側面に複段羽人
b	76 Dong Hieu	4	2	||	山+③'	④	+	菱形	接線円	
期	81 PhuPhuongI	4	2	||	山+③'	④	+	菱形	接線円	
	88 Que Tan	4	2	||	山+③	−	+	−	連続円	
	84 Yen BongII	4	2	||	③	−	祖形？	菱形	連続円	
3 a	98 Dac Glao	4	2	▲	山+③	⑥	+	−	併用	
期	97 Thon Mong	4	2	⑦	山形	⑦	+	−	接線円	
	111 Meo Vac I	4	2	||	山+③'	−	+	三角	連続円	余白なし
	105 Na Duong	4	2	||	③'	−	+	三角	連続円	余白少し
	103 Lang Vac	4	2	||	④	−	+	三角	連続円	
3	104 Mong Son	4	2	||	④	−	+	三角	連続円	余白少し
b	107 Ha Giang I	4	2	||	④	−	+	三角	連続円	余白なし
期	110 Da Do II	4	2	||	④'	−	+	菱形	連続円	余白少し
	109 Hich	4	2	||	⑤	−	+	菱形	連続円	余白なし
	106 Quan Hoa	4	2	||	②変	−	+	菱形	連続円	余白少し
	108 Cho Moi	4	2	||	?	?	+	三角	連続円	余白なし

表４　ベトナム出土**ドンソン系単画文帯**銅鼓（『ベトナムドンソン銅鼓』の再分類）

	番号　名称	蛙	画文帯	▲▲▲||	光芒間	中央圏	紋章文	雷文	円文	その他
1期	65 Lai Thuong	−	1	▲▲	山形	−	−	−	接線円	石寨山系？
	18 Son Tay	−	1	▲▲	山形	−	−	−	連続円	石寨山系との中間型
	17 Dao Thinh	−	1（無文）	▲▲	斜線	−	−	−	連続円	石寨山系？
	24 Phu Duy	−	1	||	①	①	−	−	接線円	
	39 Nui Goi I	−	1	||	①	①	−	−	接線円	
	28 Lang Vac III	−	1	||	②	①	−	−	接線円	
	30 Thiet Cuong	−	1	||	斜＋②	①	−	−	接線円	
	50 Lung Xuyen	−	1	||	②	①	−	−	−	
	52 Xuan LapII	−	1	||	山形	①	−	−	接線円	
	62 Nha Trang	−	1＋雷文帯	||	変種	①	−	−	連続円	
	29 Cuu Cao	−	1	||	②	②	−	−	接線円	
	31 Tan Uoc	−	1	||	②	②	−	−	接線円	
	49 Vu Xa	−	1	||	②	②	−	−	−	
	56 Tho Vuc	−	1＋無文	||	②	−	−	−	接線円	
	25 Ngoc Lu II	−	1	||	②	−	−	−	−	
	27 Thon Van	−	1	||	②	−	−	−	接線円	
2a期	33 Hoang Vinh	−？	1	||	山＋③変	③	−	−	連続円	
	34 Dinh Cong I	−	1	||	山＋③	③	−	−	連続円	
	38 Dinh Cong V	−	1	||	山＋③	③	−	−	連続円	
	42 Dong Son VI	−	1	||	山＋③	③	−	−	連続円	
	46 Ru Quyet I	−	1	||	山＋③	③	−	−	連続円	
	58 Vinh Ninh	−	1	||	山＋③	③'	−	−	連続円	
	59 Da Do I	−	1	||	山＋③	③'	−	−	連続円	
	57 Vung Tau	−	1	||	山形	③	−	−	連続円	
	35 Dinh Cong II	−？	1	||	山＋③	−	−	−	連続円	
	37 Dinh Cong IV	−	1	||	山＋③	−	−	−	連続円	
	61 Ha Noi I	−	1	||	山＋③	−	−	−	連続円	
	90 Lac Long	4	1	||	③	③	祖形？	−	接線円	
2b期	89 Bac Ly	4	1	||	山＋③	③	−	三角	接線円	
	91 Tan Khang	4	1	||	山形	−	−	三角	連続円	
	92 Dong Hoa I	−	1	||	斜線	④	＋	三角	接線円	
	93 Hang Bun	−	1	||	山＋③'	④	＋	三角	接線円	余白なし
	94 Thanh Hoa	？	1	||	山変＋③'	⑤	＋	三角	接線円	余白なし
要素少なく時期比定困難	45 Hoang Son	−	1	||	斜線	−	−	−	−	
	64 Ha Noi III	−	1	||	斜線	−	−	−	−	
	32 Phuong Tu	−	1	||	山形	−	−	−	−	
	40 Dong Son I	−	1	||	山形	−	−	−	−	
	41 Dong Son V	−	1	||	山形	−	−	−	接線円	
	55 An Lao	−	1＋無文帯	||	山形	−	−	−	接線円	
	43 Quang Thang I	−	1	||	斜線＋山形	−	−	−	接線円	
	36 Dinh Cong III	−？	1	||	山形	−	−	−	連続円	
	44 Quang Thang II	−	1	||	山形	−	−	−	連続円	
	47 Ru Quyet II	−	1	||	山形	−	−	−	連続円	
	51 Xuan Lap I	−	1	||	山形	−	−	−	連続円	
	53 XuanLap III	−	1（無文）	||	山形	−	−	−	連続円	
	54 Cam Thuy	−	1	||	山形	−	−	−	連続円	
	60 Binh Phu	−	1	||	山形	−	−	−	連続円	
	26 Ngoc Lu III		？	||	？				？	頭部欠損
	48 Ru Quyet III		？	||	？				？	頭部欠損
	63 Ha Noi II	−	1	||	？				？	

表5　ベトナム出土**石寨山系**銅鼓（『ベトナムドンソン銅鼓』の再分類）

石寨山系

	番号　名称	形態	蛙	画文帯	▲▲▲||	光芒間	中央圏	紋章文	雷文	円文	
複画文帯											
	10 Hoa Binh	ドンソン系	−	2（動物文）	▲▲	①	①	−	−	連続円	ドンソン系との中間　表3既出
	5 Mieu Mon I	石寨山系	−	2（動物文）	▲	①	①	−	−	連続円	ドンソン系との中間　表3既出
	7 Ban Thom	石寨山系	−	2（羽人）	▲	山形	−	−	−	連続円	ドンソン系との中間　表3既出
	11 Phu Xuyen	石寨山系	−	2（動物文）	▲	山形	−	−	−	−	
	6 Pha Long	?	−	2（無文）	▲	山形	−	−	−	−	
単画文帯											
	12 Quang Chinh	石寨山系	−	1	▲	斜線	−	−	−	−	
	13 Doi Ro	石寨山系	−	1	▲	斜線	−	−	−	連続円	
	14 Lang Vac I	石寨山系	−	1	▲	山形	−	−	−	連続円	
	15 Dong Cau	石寨山系	−	1	▲	山形	−	−	−	−	
	16 Lang Vac II	石寨山系	−	1（無文）	▲	山形	−	−	−	−	
	17 Dao Thinh	?	−	1（無文）	▲▲	斜線	−	−	−	−	ドンソン系か、表4既出
	18 Son Tay	ドンソン系	−	1	▲▲	山形	−	−	−	連続円	ドンソン系か、表4既出
	19 Pac Ta	?	−	1	▲	山形	−	−	−	連続円	
	20 Viet Khe	石寨山系	−	1	−	山形	−	−	−	−	
	65 Lai Thuong	?	−	1	▲▲	山形	−	−	−		ドンソン系か、表4既出
	66 Lang Gop I	石寨山系	−	1	▲	斜線	−	−	−	連続円	
	67 Lang Gop II	?	−	1	▲▲	不明	−	−	−	−	
	68 Binh Da	石寨山系	−	1	▲▲	山形	−	−	−	接線円	
	69 Giao Tat	石寨山系	−	1	▲	山形	−	−	−	−	
	70 Dong Son IV	石寨山系	−	1	▲	斜線	−	−	−	−	
	73 Lang Vac IV	石寨山系	−	1	▲	斜線	−	−	−	−	
	95 Lang Vac V	?	4	1（無文）	▲	斜線	−	−	−	連続円	

An English version of this paper will be published in Journal of Southeast Asian Archaeology, No 13, 1993.